非専門家から見た多重知能理論内での情動コンピテンスの位置 (2)

— 能力の自己評定の観点から —

○野崎優樹^{1,2}・子安増生¹

(¹京都大学大学院教育学研究科・²日本学術振興会)

キーワード：情動コンピテンス，多重知能，素人理論

The position of emotional competence in the multiple intelligences theory seen from laypersons (2): In respect of self-reported abilities

Yuki NOZAKI^{1,2} and Masuo KOYASU¹

(¹Graduate School of Education, Kyoto University, ²Japan Society for the Promotion of Science)

Key Words: emotional competence, multiple intelligences, lay theory

目 的

心理学の学術研究では、これまで伝統的知能と比較した際の情動コンピテンスの位置づけが議論されてきた (Mayer et al, 2008)。一方で、近年、情動コンピテンスは教育や職場などの一般の人が密接に関わる場面にも浸透してきており、この人たちが情動コンピテンスをどのように捉えているのかを明らかにする重要度が高まっている。本研究は能力の自己評定という観点から素人理論を測定し、非専門家の人が持つ多重知能理論からみた情動コンピテンスの位置づけを検討する。

方 法

調査対象者 株式会社クロスマーケティングが保有する参加者プールの中から 600 名がオンラインで調査に参加した。そのうち、同じ番号のみを連続で回答していた 16 名を除外し、最終的に 584 名 (男性 287 名, 女性 297 名, 平均年齢 44.41 歳, $SD=13.80$) のデータを有効分析対象とした。

情動コンピテンスの自己評定 Profile of Emotional Competence 日本語短縮版 (野崎・子安, 印刷中) を用いて測定した。この尺度は、自分の情動と関連する能力である“情動コンピテンス自己領域”を測定する 10 項目と、他者の情動と関連する能力である“情動コンピテンス他者領域”を測定する 10 項目ずつの計 20 項目で構成されており、5 件法で回答を求めた。クロンバックの α 係数は、情動コンピテンス自己領域で .64、情動コンピテンス他者領域で .76 であった。

多重知能の自己評定 Furnham et al. (1999) を参考に、各知能の名称と説明を提示し、集団内でののおよその自分の位置を選択させる方法を用いた。具体的には、“あなた自身は同年代の集団の中でどの位置に当てはまるかを判断し、該当する数字 1 つを選んでください”のリード文の後に、各知能について、1. 最下位：10%、2. 下位：25%、3. 中位：30%、4. 上位：25%、5. 最上位：10%から 1 つを選択するように求めた。評定を求めた知能は、1. 言語的知能 (言語能力が高く、ことばの響き・リズム・意味に敏感である)、2. 論理-数学的知能 (論理的に考えることが得意で、数的処理や計算に強い)、3. 空間的知能 (絵を描くこと、画像処理、幾何学が得意である)、4. 身体-運動的知能 (身体運動能力が高くスポーツが得意で、手先が器用である)、5. 音楽的知能 (音楽の鑑賞能力が高く、楽器を引くことが得意である)、6. 個人内知能 (自分の気持ちや価値観、思考内容をかえりみてきちんと理解できる)、7. 対人的知能 (他人の気分や動機、欲求をきちんと理解し、適切に対応できる) の 7 種類だった。

結 果

子安 (1999) および Furnham et al. (1999) に基づき、言語的知能・論理-数学的知能が学校知能という因子を、空間的知能・身体-運動的知能・音楽的知能が芸術的知能という因子を、個人内知能・対人的知能・言語的知能が人格的知能とい

う因子を構成するモデルをベースにして、確認的因子分析により、下記のモデルの適合度を比較した。

A. 情動コンピテンスが独立したモデル：情動コンピテンス自己領域/他者領域で構成される情動コンピテンスを第 4 の因子として仮定したモデル

B. 学校知能が情動コンピテンスを含むモデル：情動コンピテンス因子を仮定せず、学校知能因子から情動コンピテンスの自己領域と他者領域へのパスを引いたモデル

C. 芸術的知能が情動コンピテンスを含むモデル：情動コンピテンス因子を仮定せず、芸術的知能因子から情動コンピテンスの自己領域と他者領域へのパスを引いたモデル

D. 人格的知能が情動コンピテンスを含むモデル：情動コンピテンス因子を仮定せず、人格的知能因子から情動コンピテンスの自己領域と他者領域へのパスを引いたモデル

各モデルの適合度指標を Table 1 に示した。“A. 情動コンピテンスが独立したモデル”の AIC, BIC の値が他のモデルに比べて最も低く、他の適合度指標も最も良い当てはまりを示していた。この結果より、情動コンピテンスは多重知能理論の中で独自の概念として位置づけられることが示唆された。

Table 1 各モデルの適合度指標

	CFI	SRMR	RMSEA	AIC	BIC
モデル A	.943	.038	.082	147.58	-29.82
モデル B	.897	.055	.102	207.10	16.59
モデル C	.890	.054	.106	217.01	26.51
モデル D	.887	.048	.107	220.87	30.36

考 察

本研究の結果は、情動コンピテンスを伝統的知能に対して別個のものとして概念化する必要はないとする立場よりも、伝統的知能とは独立した概念であるとする立場 (e.g. Mayer et al, 2008) と整合している。専門家のみならず、非専門家の間でも、伝統的知能とは異なる能力として情動コンピテンスが捉えられていることが初めて示された。

引用文献

- Furnham, A., Clark, K., & Bailey, K. (1999). Sex differences in estimates of multiple intelligences. *European Journal of Personality*, 13, 247-259.
- 子安増生 (1999). 幼児期の他者理解の発達-心のモジュール説による心理学的検討-. 京都大学学術出版会.
- Mayer, J. D., Roberts, R. D., & Barsade, S. G. (2008). Human abilities: Emotional intelligence. *Annual Review of Psychology*, 59, 507-536.
- 野崎優樹・子安増生 (印刷中). 情動コンピテンスプロフィール日本語短縮版の作成. 心理学研究.